からすのえんどう　―森　はな―

山に　かこまれた　ひょうごけんの　たじまに　森はなは　生まれました。大きく　なって、学校の　先生を　しながら、子どもの　ための　どう話を書いた　人です。これは、はなが　まだ　小さい　ころの　お話　です。

はなは、たんぽぽの　わたげを　とばしたり、からすのえんどうの　ふえをふいたり　するのが　大すきです。

学校の　帰り道の　ことでした。

近じょに　すんで　いる　まさとが、はなの　ふいて　いた　からすのえんどうの　ふえを　とって　おいこして　いきました。

気もちよく　ふえを　ふいていた　はなは、顔を　くしゃくしゃに　してまさとを　おいかけました。

しかし、まさとは　足が　はやく、はなは　おいつけません。

はなは、なきながら　家に　帰りました。
お母さんは、はなの　あとを　ついて　きた　まさとを　見て、
「ほら、まさとちゃんが　こっちを　見とんなる。あんたが　なきやんだら、帰るでな。ええかげん　なきやみねえ。」
と、はなに　言って　聞かせます。
はなは　首を　ふって　いやいやを　しました。
まさとは　もじもじして　いましたが、近よって　きて　はなの　手に　何かを　にぎらせ、ぺこりと　おじぎをして　帰って　いきました。
お母さんは、
「はな、もう　なきやみねえ。いつまでも　ないとったら、なかした　子が　わるい　こと　したと　心　いためとる。」
と、　なきつづける　はなの　頭を　なでました。
「わるいのは、まさとちゃんなのに。」
そう　思うと、はなは　なみだが　止まりません。

やっと　なきやんだ　はなは、にぎりしめて　いた　手を　ひらきました。手のひらには、さっき　はなが　ふいて　いた　ふえと、もう一つ　まさとがつくった　ふえが　なかよく　ならんで　いました。

はなは、ふえを　そっと　口に　あてて　ふいて　みました。

「ピーッ、ピーッ。」

と、すんだ　音が　あたりに　ひびきました。

ふえを　ふいて　いると、なんだか　気もちが　すうっと　して　きました。

つぎの　日の　朝、　学校へ　通う　しゅう合場しょに　つくと、下を　むいて　いる　まさとが　います。はなは、まさとの　そばに　行くと、だまったまま　ぎゅっと　にぎりしめて　いた　手を　ひらきました。

はなの　手のひらに　なかよく　ならんだ　からすのえんどうが　二つ。

「ごめんな。」

今どは、まさとが　顔を　くしゃくしゃに　しました。
学校までの　道は、小さな　もも色の　花を　つけた　からすのえんどうが
風に　ゆれて　いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。